

ノーサイド

1972年5月15日、沖縄復帰。今月は、その日から46年目を迎えます。

この間、沖縄の人口は、約97万人から1・5倍の約145万人へと大幅に増加して来まし

た。全国的に人口減少が継続する中であって、沖縄は右肩上がりを示しています。

また、内外の沖縄ファンは多く、入域観光客数は、復帰当時の約41万人から21倍もの約940万人へと大幅に増加して来

ています。沖縄は観光立国として、これからも順調に訪問客、「沖縄大好き人間」のリピーターを増やして行くことで

しょう。

しかし、決してこれまでに順調に推移して来たわけではありません。そこ

には、今も基本的には変わらぬ沖縄の過重な基地負担をめぐるとの特殊性がありま

す。世界中を震撼させた2001年9月11日の米国同時多発テロ事件。そのとき

国内で急速に高まったのが、「沖縄の米軍基地はテ

ロの攻撃目標になるのでは

ないか」との不安でした。修学旅行をはじめ観光旅行

は中止・キャンセルが激増

入域観光客数は大幅に落ち

込みました。……このときの沖縄の皆さんの

の心中は、どんなだったでしょう

か。政府は、沖縄の皆さんの安全を確保し、過重

な基地負担を軽減するた

め、米軍基地の整理・縮小

をはじめ、事件や事故の再

発防止、航空機騒音や環境

対策等に懸命に取り組ん

て来ている。しかし事件や

事故等は、今なおしばしば

発生しています。

沖縄の基地問題には、復

帰以前から今日に至るま

で、幾多の長く辛い歴史や

住宅や学校、病院などが、

多くは京都出身でした。この場所に、御霊の冥福と世界の恒久平和を祈り

建立された「京都の塔」

の碑文には、野中広務先

生の沖縄の皆さんに對する思いも込められています。……また多くの沖縄

住民も運命を共にされた

ことは誠に哀惜に絶へな

い……

「京都の塔を整備した人

たちの中で、残っている

のはどうとう自分ひとり

になってしまった」と語

っていた野中広務先生。

4月14日に京都で行わ

れたお別れの会での遺

影は、益々大切になって

来ていることは何かを熱く語りかける、そんなお

顔を。

北原 駿男(きたはらい

わお) 中央大学。70歳。長野県伊那市高遠町出身。元防衛施設庁長官。元東ティモール大使。現(一社)日本東ティモ

沖繩の5月に

思うこと

私は、本上に在る私たちが、沖縄の皆さんの基地負担の実態を、少しでも一皮

「温度差」を、少しでも縮めるよう努めて行くことは、沖縄

の皆さんが一番大切にしている「チムククル肝

心」に通じるように思います。

そんなことを考えていま

すと、常に沖縄に寄り添い、

沖縄の発展に全力を尽くさ

れ、一貫して平和な国を築

くため行動して来られた野

中広務先生のこと浮かん

で参ります。前述の嘉数高

元東ティモール大使。現

台は、先の沖縄戦の激戦地

の1つ。ここでの戦没者の

ル協会会長